Education first !!

久留米大学医学部
医学教育研究センター
Center for the Study of Medical Education (CSME)

久留米大学医学部医学教育研究センター　ニュースレター　第32号　　2019 年 8月発行

第51回医学教育学会大会開催

第51回医学教育学会大会が京都で開催されました（7月26-27日）。医学教育研究センターからは、山田准教授と片山助教が研究発表を行いました。そのほか、多数の久留米大学関係者や学生が参加し、活発な議論が行われました。近年、久留米大学医学部では、文学部の安永先生に指導を頂きながら、協同学習を取り入れ、その他、カリキュラムや試験構成も様々に改変しています。また、今年は医学教育分野別評価の年でもあります（10月28日～11月1日）。医学教育が目まぐるしく変化しています。医学教育の変化は、久留米大学に限ったことではなく、全国の潮流でもあります。他大学医学部の教育実態なども知るとても良い機会になりますので、是非、多くの先生方に医学教育学会に加わって頂きたいと思います。

医学教育研究センターは教育１号館の６階にあります。大学生活に関すること、学業に関すること、留学やボランティア、部活に関すること。大学に関する悩みがあれば、どんなことでも相談に乗ります。いつでもお越しください。「手薬煉を引いて」お待ちしています。

- スタッフ一同

医学教育研究センターを楽しむためのヒント

Q：教育Cに大型モニターが導入されたのですか？

A：65inchの大型モニターです。無線で繋がるので、様々なプレゼンに活躍中です。

Q：教育Cと何の関係ありませんが、京大の研究グループが謎の粒子を発見したそうですが？

A：電荷を持たず、熱のみを伝える中性粒子だそうです。不思議ですね。

学生サークルの紹介より（救急サークルメンバー）

今号の特集

- 学生サークルの紹介
- 今月の教員の声
- 今月の医学時事

学生サークルの紹介

クリニカルスキル・トレーニングセンターを活用している学生サークルの紹介

片山　礼司　（医学教育研究センター）

クリニカルスキル・トレーニングセンターでは、シミュレーターを利用した医療技術研鑽のためのタスクトレーニングや臨床現場を再現した環境下でのフィジカルアセスメントなど、より実践的な講習会や勉強会、授業が行われています。教職員をはじめ学生の方々も多く利用されていますが、今回のニュースレターでは、トレーニングセンターを活用している学生サークルの活動を紹介してもらいます。

サークル紹介者：久留米大学医学部救急サークル 主将 **飯野友海** さん（医学科3年生）

私たち救急サークルは活動開始から3年目となり、年々活動の幅を広げつつあります。救急医学会主催のBLS選手権や地域の学校での講習会運営への参加など、種々医療系イベントへの参加を主とした活動を行なっています。BLSを基本とした医療知識を学ぶ、または広めることが活動の主眼です。

BLSとはBasic Life Support （一次救命処置）の略称です。倒れている人を発見したといった状況で、救急車が到着するまでにできる処置のことです。正しいやり方であれば一般の方でも行うことができることから、知識を持っている人が増えるほど、蘇生率の向上が期待できます。このことから医療従事者に限らず、一般の方向けの講習会を行う活動をしている団体も存在しています。九州圏内の他大学では医学生を対象にした講習会を行なっている医療系部活動・サークルが多数存在し、当サークルではインストラクターを派遣する形で活動に参加しています。

6月15日、久留米大学病院内のクリニカルスキル・トレーニングセンターの一室を借りて、初めての取り組みとしてサークル内BLS講習会を実施しました。

学生主体の勉強会をいずれ久留米でも開きたいというサークル内の方針に先立ち、久留米大学病院の諸先生方のご協力のもと、今回学内での講習会を実現することができました。今年度からサークルに参加してくれた新入生を対象にしたものでしたが、３時間程の短い時間のなかで一生懸命取り組んでくれました。教える側としても勉強になり、良い勉強会になったと思います。これからも継続して実施し、より良いものとなるよう改善しつつ活動の形にして行きたいと思います。

他大学の医療系部活動・サークルに比べてまだ活動年数の少ない、模索するところも多いサークルですが、だからこそメンバー一人一人の意見を尊重し、自由に活動を広げていきたいと思っています。

医学教育研究センター（CSME）

https://csme.kurume-u.ac.jp

クリニカルスキルトレーニングセンター

https://www.kurume-u.ac.jp/site/cstc

Q：　クリニカルスキル・トレーニングセンターは学生だけでも使用できますか？

A：　使用目的や内容によって使用を認めています。気軽に相談してください（内線 6597）。

Q：　シミュレータを使用したいのですが使用方法は教えてもらえますか？

A：　説明や教示の対応を行います。使用に不安があれば問い合わせてください 。

今月の教員の声

第51回医学教育学会を振り返って

山田　圭　（医学教育研究センター）

7月26日、27日に京都府立京都学・歴彩館／稲盛記念会館で行われた第51回日本医学教育学会で演題発表いたしました。演題は、「臨床実習前演習（PCCE）：学生と教員によるプログラム作成と評価」と「臨床検査専門学校における協同学習の効果」です。前者は、牛嶋公生教授を中心にPre-Clinical Clerkship Exercise (PCCE)部会が作成したPCCEプログラムについて、終了後に行った学生と教員に対して行ったアンケート調査をもとにプログラムを評価したものです。PCCE部会に所属する学生9人と教員13人が、スムーズに臨床実習を回れるようにするため準備プログラムを一緒に協議し作成しました。教員は「臨床現場ではこんなことを知っていたらいいだろう」という熱い思いを持って提言し、学生側も4，5，6年対象に事前にアンケート調査して得た情報を基に協議しました。理想を追求したプログラムでしたが、結果的に座学を中心とした講義よりも、実技を中心としたプログラムの方が学生には受け入れられていました。双方向性の症例検討講義もありましたが、教員1人に対し100人という大人数で、真の参加型には至らず、今後の改善がのぞまれます。座長から、臨床実習前にOSCEがあるのにこのようなプログラムをなぜおこなうのですかと質問をいただきました。現状ではOSCEだけではスムーズに臨床実習に入れていない部分があると考えますのでさらに検討を加えていこうと思います。

今月のワンコ（コタロー：寝）

もう一つの演題は、私が臨床検査専門学校の吉野先生のご協力のもと、従来一方向性で行っていた「筋電図・末梢神経伝導検査」の講義に、協同学習を導入した講義の評価です。学生35名を8班に分け、協同学習の基本方針に従いグループ協議、グループ発表を行いました。グループ別の発表回数は、講義を重ねるごとに増え、中間試験の点数は昨年よりも上昇し、特に点数の低い学生が減少する結果でした。学生のアクティブラーニングを促進する意味で、医学科での導入に期待が持てる内容でした。

医学教育研究センターでは、学生の学修意欲を高めるため、いろいろなプログラムの作成・改善を提言していますが、それを全国の場で客観的に評価いただき、偏ったものにならないよう今後もブラッシュアップしていきたいと考えています。

今月のワンコ（コタロー：起）

今月の医学時事

「老衰が死因の３位に」という報道がありました（安達 洋祐）

日本人の死因は、1958年以降、がん・心臓病・脳卒中が上位3つを独占してきた(三大死因)。ところが、1994年に高齢社会(高齢者＞14%)、2007年に超高齢社会(高齢者＞21%)に入ると、2011年の死因は肺炎が脳卒中を抜いて3位になり、2018年には肺炎と脳卒中を抜いて老衰が3位になった。死因に占める割合は、がん27%、心臓病15%、老衰8%、脳卒中8%、肺炎7%である(五大死因)。

ただし、2017年に肺炎が急に減少したのは、厚生労働省の人口動態統計で誤嚥性肺炎を肺炎から除外したからである。肺炎(7%)と誤嚥性肺炎(3%)を合計すると、「肺炎」は老衰より多く、2018年も死因の3位で10%を占める。

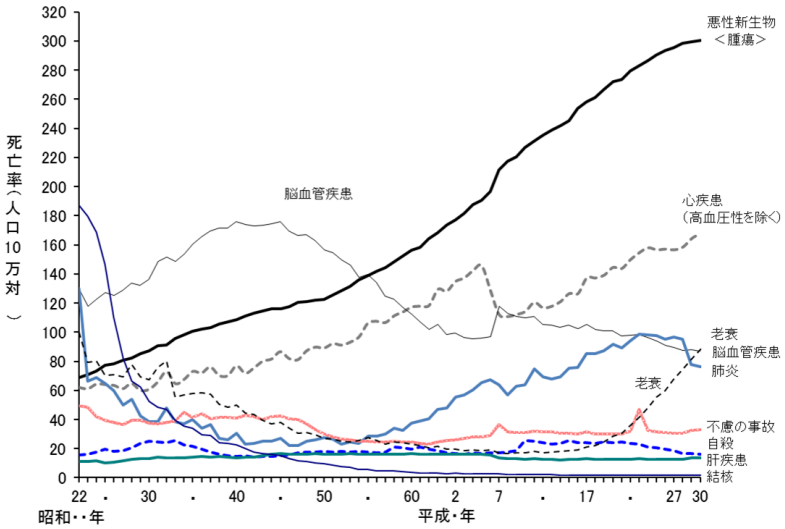
老衰とは何だろうか。一般的には、「年をとって心身が衰えること」(新明解国語辞典)であるが、医学的には、「高齢者が死亡し、死因が十分に把握しえなかった場合に、老衰死という名がよく用いられた」(医歯薬出版)、「健康な老人が死因と推定できる病気なしに消え入るように生を閉じた場合を老衰死または自然死と称し、『天寿を全うした』と表現することはよくあるが、医学的な死因とすべきかについては議論がある」(医学書院)と書かれ、『平成31年度版 死亡診断書(死体検案書)記入マニュアル』には、「高齢者で他に記載すべき死亡の原因がない、いわゆる自然死の場合のみ」である。

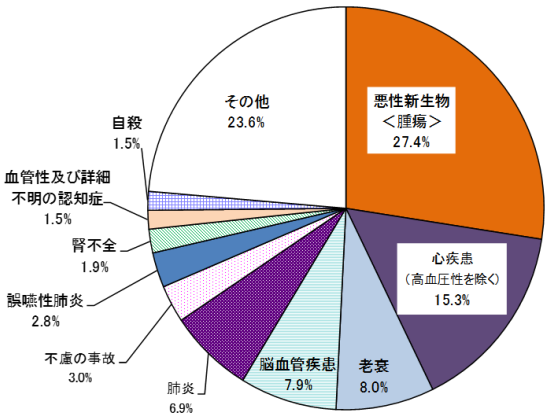
ちなみに、2018年の死因の9位は認知症であり、認知症が死因の10位以内に初めて入った。死因分類では、血管性認知症(精神/行動の障害)であり、Alzheimer病(神経系疾患)は除外されている。血管性認知症(1.5%)とAlzheimer病(1.4%)を合計すると、「認知症」は腎不全より多く、2018年は死因の7位で3%を占める。

厚生労働省：
平成30年（2018）人口動態統計月報年計（概数）の概況

https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai18/index.html

今月のワンコ（コタロー：静）





医学教育研究センターは最先端の技術で学生と教員を繋げます。

編集スタッフより

こんにちは。編集担当の柏木です。第３２号です。とても暑い日が続いていますが、毎日汗だくで歩いています。今月はワンコ（コタロー）で埋め尽くしてみました。自慢のワンコ、ニャンコが居ましたら医学教育研究センターまでコメントを添えてお送りください。

お問い合わせ先

当ニュースレターついてお気軽にお問い合わせください。 記事も募集しています。

久留米大学医学部 医学教育研究センター　編集担当：柏木　孝仁
〒830-0011 福岡県 久留米市旭町67 TEL: 0942-31-7764 FAX: 0942-31-7765
https://csme.kurume-u.ac.jp　E-MAIL: csme@med.kurume-u.ac.jp